

ヨハネ福音書3章3節「新しく生まれる」の意味の整理

香西信

はじめに

イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ福音書3章3節)

このイエスの言葉は、ヨハネ福音書3章においてファリサイ派の議員であるニコデモとの間で起きる問答の重要な導入部となっている。ここで、イエスは「新しく生まれる」ことを神の国に入る(救いに与る)大切な条件として挙げている。この言葉を契機にイエスとニコデモとの対話が始まる。対話を重ねるうちに、イエスが言った「新しく生まれる」ことの意味とニコデモの理解にズレが生じ、両者の対話は誤解を孕んでいく。誤解から生じるニコデモの3つの問い(2節¹、4節²、9節³)が誘い水となって、イエスの語りが漸次深まっていく。「新しく生まれる」が「水と霊から生まれる」という言葉で敷衍されていく。

ヨハネ福音書のプロローグには「この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」(1章13節)とあり、キリストを信じる者を表す重要な鍵語として「神から生まれる」という言葉が提示されている。本稿ではこの「神から生まれる」という鍵語の理解を目的として、「生まれる」と「新しく」という語の意味、その二義性をそれぞれ整理する。次に両者の関係を踏まえた上で、問答における意味のズレの原因を考察し、誤解の原因となった両者の終末観の相違を確認する。

1-1. 「生まれる」の二義性—「生まれる」と「産まれる」

3節で「生まれる」γεννάωは、アオリスト受動相(接続法)γεννηθῆναιの形で使われている。γεννάωとは「母が子を産む」「出産する」である。受動相では、「子が母の胎から産まれる」となる。これは、ルカ1章13節、57節、23章29節、マタイ1章16節に用いられている。4節に見られるニコデモの「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」という発言からは、ニコデモがイエスの「新しく生まれる」という発言を「産まれる」という意味に解したことがわかる。

また、γεννάωとは「父親が子をもうける」意味を持つ。この用法は使徒言行録7章8節b、29節、マタイ福音書のイエス誕生の系図「アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを…」(マタイ1章2~16節)に見られる。「父が子をもうける」は受動相として「子が父から生まれる」となる。(正確には「生まれられる」)また「産まれる」の意味と近似した意味、すなわち受胎させる主体を前置詞ekでとり、「受胎させら

れる」「起こされる」「初めをつくられる」の意味も取る。この用法は、マタイ 1 章 20 節 c「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」、ガラテヤ 4 章 23 節「ところで、女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由な女から生まれた子は約束によって生まれたのでした。」において使われている。

3 節のイエスの発言における「生まれる」のニュアンスは「子が父によって生まれる」「子が父によって初めをつくられる」である。この後に、5 節 c「誰でも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」、6 節「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」、7 節『「あなた方は新たに生まれなければならない。』』と言ったからといって、驚くことはない。」、8 節 b「霊から生まれた者も皆そのとおりである。」とイエスは繰り返し語り、その受胎させる主体である父なる神の存在を漸次明らかにする。この受胎させる主体との関係は、後述する「新しく」との結びつきにおいて限定されていく。

1-2. 「生まれる」の意味の展開(1)―教師と生徒の関係

「子をもうける」「子とする」「生まれる」という言葉は、ユダヤ教の伝統では、神と民が主従関係に入ること、ラビと信者が教師と生徒の関係に入することを指した。卓越した業と厚い温情を持つラビ（教師）を「父親」という言葉で表現し、そのような教師に対して深い尊敬の念を持つ弟子はラビから「子」と呼ばれた。

R.E.ブラウン⁴によると、このような主従関係あるいは教師と生徒の関係を表す「生まれる」は、すでにイエスの時代に使われていた。例えばマタイ 23 章 8 節～10 節には「だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ。また、地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父おひとりだけだ。『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。」とあり、イエスは弟子たちに、神に対して「父」、自らに対して「教師」と呼ぶようにと教えている。またガラテヤ 4 章 19 節には「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。」とあり、使徒パウロも自らの福音宣教によって弟子をつくることを「生む」と表現していることがわかる。第一コリント 4 章 15 節⁵、フィレモン 10 節⁶でも、パウロは自分が異邦人伝道によって建て上げた共同体のことを「わたしがイエス・キリストにおいて、もうけた子」と呼んでいる。

1-3. 「生まれる」の意味の展開(2)―改宗による新しい自己の獲得

教師と生徒の関係において興味深いのは、ユダヤ教へ改宗した異教徒は「新しく生まれた」とみなされたという指摘である。TDNT⁷によると、ユダヤ教への改宗者は新生児とみなされた。つまりユダヤ教へ改宗することは神の創造の業に譬えられたため、改宗者は神によって新しく生まれた者であると考えられた。

神とは無からの創造者（創世記 1 章 1 節⁸）である。その神の御業に例えられるほど改宗者の獲得とは、比類なき偉大な行為であった。改宗する以前はただ漫然と生きていた者はユダヤ教への改宗（新しく生まれること）によって、はじめて主体的に人間性を獲得（自らが信じる道を選択）し、真の自己として生きはじめる。改宗者が「新しく生まれた」子とみなされるのは、彼が真実で聖なる生き方を主体的に獲得することによる。その結果、彼はそれまでの異教徒としての生き方、過去を一切問われない特別な存在となる。この考え方を知っていたパウロは改宗してキリスト者となることを「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」（第二コリント 5 章 17 節）と言った。キリストを信じることによって、悔い改め、自分の意志で自己を選び取る。この考えはヨハネ福音書における「新しく生まれる」ことを考える上で重要となる。

2. 「新しく」の二義性—時間的概念と空間的概念

次に「生まれる」の意味を限定している「新しく」という言葉 $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ の意味について考察する。「生まれる」と同様に $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ の意味も二義性を持つ。ニコデモがイエスの言葉を誤解した原因は、 $\gamma\epsilon\nu\nu\acute{\alpha}\omega$ 「生まれる」の二義性に $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ 「新しく」の二義性が加わったからであると考えられる。

$\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ とは時間的に「再び」「新しく（もう一度）」である。ガラテヤ 4 章 9 節⁹にこの用法が見られる。ニコデモは「新しく」「再び」「産まれる」とこの語を受け取った。つまり「 $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ （再び）」によって規定された「 $\gamma\epsilon\nu\nu\acute{\alpha}\omega$ （生まれる）」を「老人が再び母の胎に入って（再び）生まれる」と解してイエスの言葉に躓いた。

しかし $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ は本来、空間的な概念「上から」を意味する。マルコ 15 章 38 節には「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、」と空間的な「上」を示す言葉として $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ が使われている。ヨハネ 19 章 23 節「兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡すようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。」も同様である。この「上から」は「天から」、さらには「神から」という意味に空間的に拡張される。それは 3 章 27 節「ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。」、31 節「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。」において確認できる。「神から」の意味に用いられているのは、19 章 11 節のイエスの言葉「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。」である。イエスが 3 節「新しく生まれる」で含意しているのは、この「天から(神から)」の意味と考えられる。それと共に、前述したようにこの言葉は改心による真の自己の獲得を意味した。イエスはこの両義性を自覚して $\alpha\nu\theta\epsilon\nu$ という言葉を使っていたと思われる。

3.終末に神から生まれる－終末におけるメシア待望

繰り返すと、イエスは「新しく生まれる」という言葉によって、改宗して主体的に新しい生き方を獲得する(神の子となる)ことを言い表した。その言葉を、ニコデモは「もう一度母の胎から産まれる」と解した。これが誤解の原因となった。しかし一方で「新しく生まれる」「神から生まれる」という言葉は伝統的には黙示的・終末論的文脈において語られた。そのことを考え合わせると誤解の原因はもう少し複雑になる。

詩篇 2 編 7 節には「主の定められたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。『前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。』」とある。これは神が王を生む、神の子とされるという王の即位式における定型句である。即位した王は神によってメシア「油を注がれた」者となる。「油注がれた者」という称号は、バビロン捕囚以後、長期間、異邦の大帝国の支配下に置かれて、王を持つことができないイスラエルの歴史の中で、イスラエルに救いをもたらす救世主を指すようになる¹⁰。

新約聖書で「油注がれた者」(メシア)の訳語とされたのがキリスト(Χριστός)である。使徒言行録 13 章 33 節は「つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。それは詩編の第二編にも、『あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ』と書いてあるとおりで。」と伝統的なメシア(キリスト)預言として詩篇 2 章 7 節を位置付けている。へブル書 1 章 5 節¹¹、5 章 5 節¹²も同様である。

神の子として生まれるという表現は、初期ユダヤ教では、終末における希望を意味した。使徒言行録 13 章 33 節でも神の子として生まれる時点はキリストの再臨の日すなわち終末であることが前提とされている。また終末において、神の子とされる条件として義人であることが要求された。知恵の書 5 章 5 節¹³、ソロモンの詩篇 17 章 30 節にあるように、現世において敬虔な人は父として表現される最も高い存在の理想の息子として認められた。(シラ 4 章 10 節、知恵 2 章 13 節、16 節、18 節)

このような思想を継承して、共観福音書ルカ 20 章 36 節¹⁴は理想の親子関係を終末においてのみ実現される希望ととらえた。ルカ 6 章 35 節には「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである」とある。終末に「神の子」とされることは現世における善行によって担保される。同様な記述は平行箇所であるマタイ 5 章 44 節～45 節¹⁵にも認められる。ファリサイ派の議員であったニコデモは当然、終末に義人は神の子として生まれるという考えを知っていた。とすれば、彼がイエスの言葉「新しく生まれる」を「再び母の胎から産まれる」という意味に解したとするのは、一面的すぎる。ニコデモは新しく生まれることが神の子とされることを意味することを承知していた。にもかかわらず、なおも、イエスとの理解がズレた。その原因は、終末はいつ到来するか、神の子として生まれるのはいつか、という終末観の相違にあったと推察される。

4.新しく神の子とされるのはいつか—現在の終末論

原始キリスト教の中心的使信も初期ユダヤ教の黙示思想から継承した終末待望であった。それはパウロ書簡や共観福音書を一読しても容易に確認できる。しかし、ヨハネ福音書は黙示的終末論の立場をとらない独自の終末論を持つ。それは、イエスを今現在、信じるか否かによって裁きと救いは既に起こっている、現在化している、今こそが終末であるというヨハネ福音書に特徴的な現在の終末論である。そこで、今まさに、裁きと救いの対象になりつつある、なっているものが「世」である。

R.ブルトマン¹⁶によると「世」(κόσμος)はヨハネ福音書の二元論において重要な意味を持つ。第4福音書において「世」(κόσμος)とはギリシャ的意味で「神々と人間及び彼らのために生じたものの全体」として理解されていない。そうではなく、「世」とは、神によって創造された人間存在を意味する。プロローグには「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」(1章4節)とある。人間が神を知るために用いる「命」「光」とは「理性や良心の光」ではなく、「人間の被造物性に関する知識」である。けれども被造物としての「世」=人間は、自らが神に創られた存在であることに蒙昧であり、世界観、倫理、正当性の基準を造り出し、神に対して反逆し、王となる。これが世の本質である。

ブルトマンはヨハネ福音書の二元論を規定するものとは、ヘレニズム神秘主義の特徴である魂と肉体の対立などではないという。それは人間の被造物性を人間自らが承認しないこと(不信仰)から生じた「神」と「世」の対立である。罪とは不信仰である。(16章9節)「世」の不信仰が罪として露わになるのは、啓示(イエスの言葉)の語りかけによってである。我々は今イエスの言葉を聴いて従うか否かの決断を迫られている。

3章18節に「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」とある。これは啓示(イエスの言葉)の語りかけによって、世は2つの可能性に分離(裁く κρινω)されることを意味する。啓示によって分離される2つの可能性とは①世に固執しそこにとどまることを選ぶ、②世に生きながらイエスに選ばれた者(神の子)として生きる決断をするという2つの道である。

8章23節をみると「イエスは彼らに言われた。『あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。』」とあり、ἀνωθεν「上から」「神から」という言葉の対比として「下から」「ἐκ τῶν κάτω」という言葉が置かれている。「下から」という言葉は「上」「天」「神」と対をなしており、神を拒絶する人間存在、まさに「世」そのものの姿である。イエスの啓示に直面して逼迫する信仰の決断とは、「上に属するか(新しく生まれるか)」と「下(世)に属するか(属したままでいるか)」という2つの道の選択の問題と考えられる。

まとめ

以上、ヨハネ福音書3章3節のイエスの言葉「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」に使われた γεννάω と ἄνωθεν の意味を考察して、イエスとニコデモの誤解の原因を整理してみた。

表層的には、4節「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」このニコデモの言葉から、誤解の原因は推し量られる。しかし、ニコデモはファリサイ派の教師であり、「新しく生まれる」ことが「神の子とされる」こと。黙示的終末観すなわち終末において義人(神の子)とされるといふ伝統的考えを知っていた。にもかかわらずイエスの意図する全く新しい現在の終末観を理解できず躓いた結果、両者の対話は誤解を孕むものとなった。イエスの現在の終末観が「世」=人間にとってその常識の枠を超えた如何に驚くべき考えであったかということは7節で念押しされるイエスの言葉「『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。」あるいは9節のニコデモの言葉「どうして、そんなことがありえますか」からも伺える。

本稿では、「新しく生まれること」と洗礼(バプテスマ)の関係、「霊によって生まれる」こと、ヘレニズム神秘主義との関係については触れなかった。これらの重要なテーマについての研究は今後の課題としたい。

参考文献

・テキスト

Novm Testamentum Greece, E. Nestle/K.Aland, 27,1993.

Biblia Hebraica Stuttgartensia, 1975.

新共同訳聖書(旧約聖書続編つき)、日本聖書協会、2012年。

・辞典及び註解書

W.Bauer, eds *F.W.D Greek-English Lexicon of New Testament and Other Early Christian Literature*, University of Chicago press, 1979.

Moulton, Geden *Concordance to the Greek new Testament* T&T Clark International, 2002.

岩隈直『新約聖書ギリシヤ語辞典』教文館、1981年。

G.Kittel/G.Friedrich, trans. G.W.Bromiley, Grand Rapids, W. B. E *Theological Dictionary of the New Testament* .Eerdmans Publishing Company.

D .N.Freedman *Anchor Bible Dictionary* , Doubleday, 1992.

高津春繁『ギリシア語文法』岩波書店、2007年。

Raymond.E.Brown, *The Gospel according John(i-xii)*, New Haven and London, Yale University Press , 2008 .

¹ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさる

ようなしるしを、だれも行ふことはできないからです。」これをニコデモはイエスに対する一種の問いと理解した。

²ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」この言葉がニコデモの誤解を表す典型的なものとされる。イエスの言葉に対する驚きがよく現れている。

³するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。これは「霊から生まれる」ものについてのイエスの言葉を受けてのものである。

⁴Raymond.E.Brown, *The Gospel according John(i-xii)*, New Haven and London, Yale University Press 2008 ,p.128-149.

⁵キリストに導く養育係があなたがたに一人いたとしても、父親が大勢いるわけではない。福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです。

⁶監禁中にもうけたわたしの子オネシモのことで、頼みがあるのです。

⁷ G.Kittel/G.Friedrich, trans. G.W.Bromiley, Grand Rapids, *Theological Dictionary of the New Testament* .

⁸「初めに、神は天地を創造された。」ここで使われている *בָּרָא* は神の創造行為にのみ用いられる動詞であり神の主権をも意味する。(『新約旧約聖書学大辞典』、教文館、1995年、704頁。)

⁹しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。

¹⁰原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009年、126頁。

¹¹いったい神は、かつて天使のだれに、「あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた、「わたしは彼の父となり、／彼はわたしの子となる」と言われたでしょうか。

¹²同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。

¹³それがどうして神の子らの一人となり、／聖なる人たちの仲間に加わったのか。

¹⁴この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。

¹⁵しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

¹⁶R. ブルトマン、「ヨハネ福音書の終末論」『ブルトマン著作集 11 神論文集 I』土屋博訳新教出版社、1986年、153 - 173頁。